

## 高校スポーツ指導者のスカウト活動

阿 部 征 次

### はじめに

優秀な選手や強いチームを育成するための重要な条件の一つとして、名コーチといわれる人は等しく「優れた素質を持った選手との出会い」をあげている<sup>1) 3)</sup>。指導者に優れた技術・体力の指導力がありコーチングの効果が上がったとしても、結果としての競技成績は選手の潜在力の制限を受けざるを得ない。指導したいと思う選手が、自分のチームに入ってくるかどうかは、チームの成績を左右する、大きな問題であると思われる。そこで指導者は、選手が入ってくるのを待つだけでなく、入学・入部するよう働きかけを行う、いわゆるスカウト活動を行うことが多くなる。スカウト活動には、学校であれば、入部以前に入学という関門をはじめ入学金・授業料などの経済的な問題、また自宅通学が無理な場合の生活の問題など、さまざまな問題を抱えていると推察される。

現実にスカウト活動が行われ、競技成績に影響があると思われるのかかわらず、スカウト活動についてほとんど調査されておらず、コーチング関係書にも取り上げられていない。そこで本研究は、高校スポーツ指導者のスカウト活動を取り上げ、スカウト活動の実態と、それに関連して起こると思われる問題について調査し、コーチングの効果的遂行の条件の一つとしてのスカウト活動のあり方や、教育機関におけるスポーツ活動としての限界について、検討を加えたので報告する。

### 研究方法

対象は、前回調査と同様1990年および1991年度高校全国大会出場の、次の種目に登録されている監督である。種目はラグビー・サッカー・バスケットボール・バレーボール・硬式野球・陸上競技の6種目425名である。調査期間は1993年2月16日～3月25日で、方法は質問紙法とし、配布と回収は郵送で行った。425名中、回収数は270で、回収率は63.5%であった。

質問項目は、スカウト活動の必要性、スカウト活動の実態、スカウトする選手選択の基準、入学選考における推薦制、学費免除などの経済的援助の有無などについて、40項目からなり、回答は6～10の選択肢を設けた。

スカウト活動に関しては、学校が公立か私立かによって異なると考えられるので、公私別にクロス集計し $\chi^2$ 検定をおこない、5%水準以下で有意差を判定した。対象者全体の集計は $N = 270$ 、スカウト活動をしている対象者の集計は $n = 250$ で行った。統計処理にはSPSS for Macintoshを用いた。

### 結 果

対象となった指導者の年齢等の属性を、公立と私立に分けて示したのが表1である。現在指導しているチームの指導年数に公私別に有意な差が認められ( $t = 5.41$   $p < 0.001$   $N = 270$ )、私立の方が4.9年長くなっている。他の項目は公私別の差は認められなかった。

スカウト活動と競技成績との関係についてという

表1 対象の属性

(1) 指導種目	公立		私立		全体	
	人	%	人	%	人	%
ラグビー	20	13.4	14	11.6	34	12.6
サッカー	18	12.1	13	10.7	31	11.5
バスケットボール	31	20.8	26	21.5	57	21.1
バレーボール	29	19.5	30	24.8	59	21.9
硬式野球	13	8.7	19	15.7	32	11.9
陸上競技	38	25.5	19	15.7	57	21.1
計	149	100	121	100	270	100.1

(2) 年齢	歳	歳	歳
平均年齢	43.8	42.6	43.3
標準偏差	7.73	8.22	7.96

(3) 指導年数	年	年	年
平均年数	20.1	18.3	19.3
標準偏差	8.19	7.75	8.03

(4) 現チームの指導年数	年	年	年
平均年数	11.2	16.1	13.4
標準偏差	6.98	7.80	7.73

(6) 学科別						
普通科	62	41.6	81	66.9	143	53.0
体育科	32	21.5	26	21.5	58	21.5
その他	67	45.0	29	24.0	96	35.6
計	161		136		297	

(7) 勤務先						
高校教員	146	98.0	115	95.0	261	96.7
高校職員	1	0.7	5	4.1	6	2.2
その他	1	0.7	1	0.8	2	0.7
無回答	1	0.7	0	0.0	1	0.4
計	149	100	121	100	270	100

問に対する回答は次のようになっている (N = 270)。

決定的な関係がある	98 人	36.3 %
大きな関係がる	143 人	53.0 %
やや関係がある	21 人	7.8 %
あまり関係ない	3 人	1.1 %
その他	3 人	1.1 %
無回答	2 人	0.7 %

97.1 %がスカウト活動と競技成績の間には、関係があることを認めている。この問に対する回答は、公私別に有意な差はなかった。

スカウト活動の必要性については、大いに必要・必要・やや必要を合わせ95.9 %が必要性を認め、公私別に差は認められない。

「スカウト活動にどの程度力を入れていきますか」という問に対する答を図1に示した。非常に力を入れている・力を入れているが公立50.3 %・私立61.1 %であり、あまりしていない・していないが公立はそれぞれ11.4 %・12.1 %に対し、私立は6.6 %・1.7 %と有意な差が認められた ( $\chi^2 = 15.91$   $P < 0.05$   $N = 270$ )。

「スカウト活動にもっと力を入れるべきだと思うか」には、次のような回答が得られた。

もっと活動したい	104 人	38.5 %
もう少ししたい	88 人	32.6 %
現在でよい	61 人	22.6 %
今より少ない方がよい	2 人	0.7 %
やらなくてよい	8 人	3.0 %
その他	2 人	0.7 %
無回答	5 人	1.9 %

この問の回答に公私別の差はなく、71.1 %は、もっと活発な活動をしたいと思ってる。

図2は、現在行っているスカウト活動の範囲について、スカウト活動をしていると答えた公立131人と私立119人の回答を、公私別に示したものである。活動の範囲は、学区内と県内隣接地区を合わせると公立51.9 %・私立27.7 %であり、隣接県から全国は公立2.3 %・私立27.7 %と公私別に有意な差が認められる ( $\chi^2 = 52.05$   $P < 0.001$   $n = 250$ )。

スカウト活動をしたい範囲は、次のような回答が得られた。

	公立	私立	全体
学区内	7.6 %	0.8 %	4.4 %
市町村内	1.5	1.7	1.6
県内隣接地区	5.3	3.4	4.4
県内全域	54.2	20.2	38.0
隣接県	15.3	28.6	21.6
地方 (関東など)	1.5	7.4	4.4
地方より広い地域	0.0	5.9	2.8
全国	6.9	18.5	12.4
広げたくない	6.1	12.6	9.2
無回答	1.5	0.8	1.2

スカウト活動をしたい範囲の回答の割合には、公私別に有意な差が認められた ( $\chi^2 = 53.98$   $P < 0.001$   $n = 250$ )。

スカウト活動に費やす日数は、年間平均公立9.8 (SD = 8.34) 日・私立16.3 (SD = 12.81) 日と、私立が公立の2倍弱と有意な差を示している ( $t = 4.67$   $P < 0.001$   $n = 250$ )。

スカウトのために見る試合数は、1~4回が42.4 %と最も多く、10回以上見るは17.2 %で、公私別の差は見られない。そのために指導するチームの練習を見られない日数は、図3のようになっており、公私別に有意な差 ( $\chi^2 = 24.88$   $P < 0.01$   $n = 250$ ) が見られた。

スカウトする対象の選手を決める際の参考資料を複数回答で求めた結果、次に示すようになっており、どの項目も公私別の差は認められなかった。

試合成績	86 人	34.4 %
選手の動き	196 人	78.4 %
身体形態	181 人	72.4 %
体力データ	123 人	49.2 %
記録データ	46 人	18.4 %
遺伝的データ	19 人	7.6 %
既往症	11 人	4.4 %
競技歴・トレーニング歴	73 人	29.2 %
家庭環境	65 人	26.0 %
その他	21 人	8.4 %

スカウトした選手が入学してくる割合は、80 %以上30.8 %・60~80 %未満26.8 %と高い。スカウトした選手が入学後期待通りに活躍する率については、

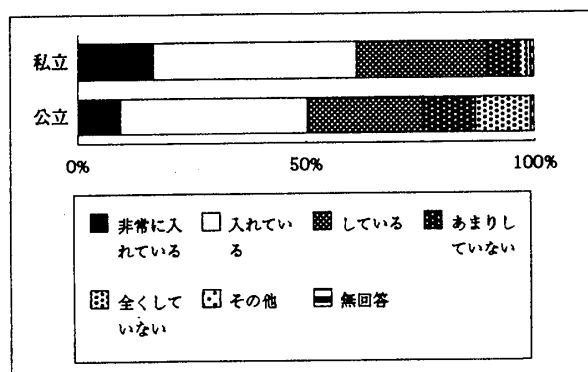


図1 スカウトに入れている力の程度

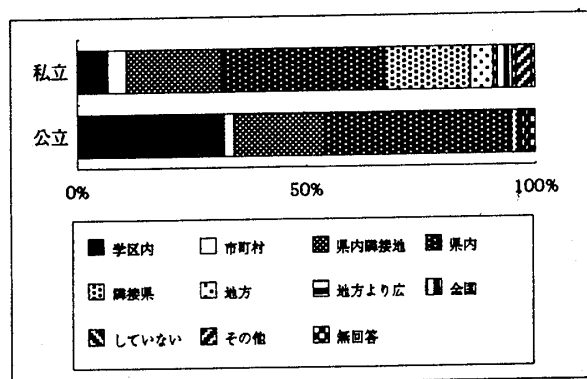


図2 現在のスカウト活動の範囲

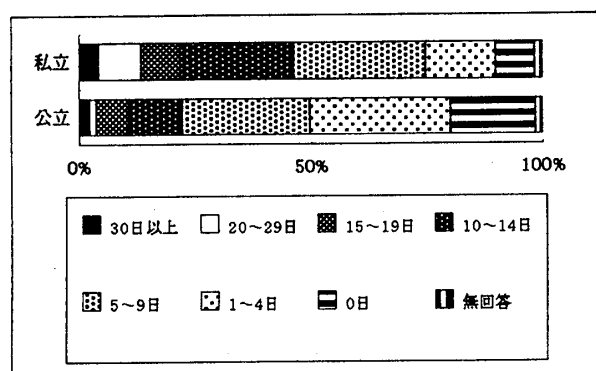


図3 スカウト活動のための年間練習欠席日数

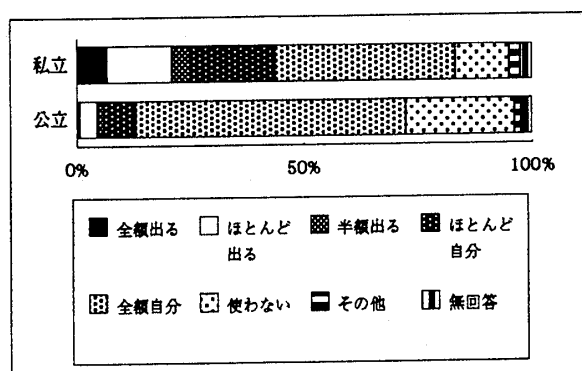


図4 スカウト活動経費の出所

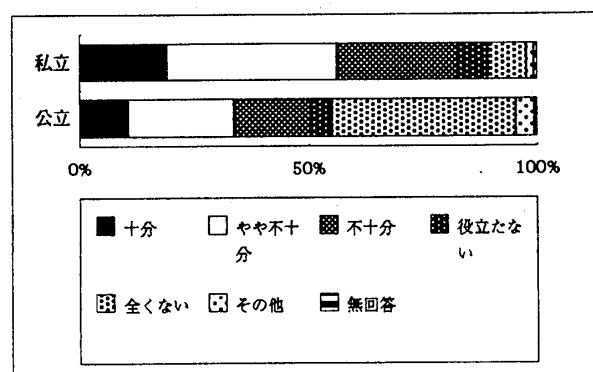


図5 推薦入学制度の有無と程度

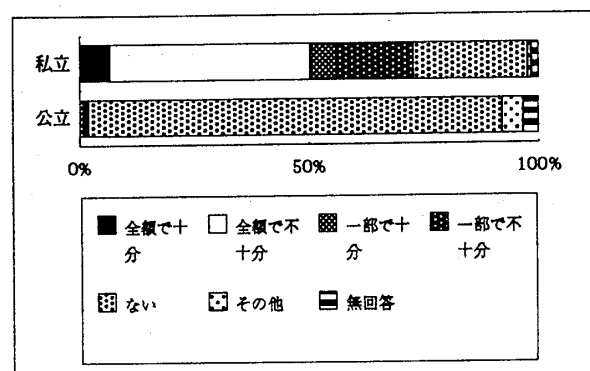


図6 経済的援助の制度と程度

80%以上期待通りという答が41.5%，60～79%が期待通りというのが35.2%と高い率を示している。これらの項目に公私別の差は認められなかった。

スカウト活動で会ったり電話する相手は，本人に会うが59.2%で，中学の指導者92.0%・中学の担任や校長などの学校関係者73.2%の方が高い率を示していた。

会って話す内容は次のようになっている（複数回答）。

指導者自身について	70人	28.0%
指導方針	174人	69.6%
チームについて	179人	71.6%
経済的条件	45人	18.0%
入学条件	64人	25.6%
卒業後の進路	124人	49.6%
その他	17人	6.8%

これらの項目で「経済的条件について」だけに，公私別の有意な差が見られた（ $\chi^2 = 29.86$   $P < 0.001$   $n = 250$ ）。

スカウト活動で選手に影響を与える人，つまりスカウトする側からみれば，頼りになる人を複数回答で得た結果，最も多いのは中学の指導者の93.2%，次いで選手の親が66.8%であった。

スカウト活動は，77.8%が指導者自身，13.7%がコーチングスタッフが行っており，スカウト担当者が行うという答は4人（1.5%）である。57.9%がスカウト専門の担当者がいてほしいと答えている。これらの項目には公私別の差は見られなかった。

スカウトの対象となる選手の情報源を複数回答で求めたところ，中学の先生が75.6%と最も多く，外部の協力者36.0%，OB・OG29.6%などが主で，組織的に情報を集めているという答は6.3%であった。

スカウト情報の収集のための組織化は，76.3%が必要性を認めており，組織は77.0%がつくろうと思えばできると答えているが，うち42.2%はつくるには困難が伴い相当な努力が必要だと答えている。これらの項目には公私別の差は見られなかった。

このようなスカウト活動に伴う経費の出所を図4に示した（ $n = 250$ ）。学校・後援会から全額出るのが公立0.8%・私立6.7%，学校・後援会からほとんど出

るは公立3.8%・私立14.3%，学校・後援会から半額が公立1.5%，私立4.2%，ほとんど自己負担は公立6.9%，私立18.5%，全額自己負担が公立59.5%，私立39.5%，使わないが公立23.7%・私立11.8%となっている。学校・後援会から半額以上でるが公立6.1%・私立25.4%，全額自己負担と使わないを合わせると公立83.2%・私立51.3%と差がみられた（ $\chi^2 = 32.54$   $P < 0.001$   $n = 250$ ）。

スカウト活動経費の額は公私別に差がなく，10万円未満が53.2%と最も多く，使わないの27.6%を合わせると，81.5%が10万円以下の経費しか使っていないことを示している。

スカウト活動を通して指導者は，いろいろな経験をしていると思われるが，スカウト活動で良かったと思うことがあるかという問いに対し，90.6%が良かったと思うことがあると答えている。逆に嫌な思いをしたことがあるという答えも68.1%あった。

良かったこととして上げられているのは，「知人が増えた」50.8%，「その後のスカウト活動に協力が得られた」46.4%が主なものであった。

現在のスカウト活動に満足しているかという問いに対する答の割合は次のようである（ $n = 250$ ）。

大いに満足	5人	2.0%
おおむね満足	67人	26.8%
やや満足	97人	38.8%
やや不満足	56人	22.4%
おおいに不満足	17人	6.8%
その他	4人	1.6%
無回答	4人	1.6%

スカウト活動の現状に，やや満足まで含め74.8%は一応満足していると答えている。スカウト活動の満足度に公私別の差は見られなかった。

スカウト活動をしているかどうかにかかわらず，選手が受験した場合，合格できるかどうか，合格後の学費や生活の場をどうするか，は指導者にとって大きな関心事である。そこで入学選考での推薦制度や学費免除の制度，寮や合宿所の有無について，全回答（ $N = 270$ ）を対象に集計した。

入学選考に際して，推薦入学制度の有無と，制度が十分かどうか，という問いへの答の割合を図5に示

したが、公私別に差が認められる ( $\chi^2 = 38.94$   $P < 0.001$   $N = 270$ )。十分な制度があると答えたのは、公立 10.7%・私立 19.0%，制度に不満を持っているのは、公立 44.3%・私立 70.2%である。公立 40.3%・私立 8.3% G が、推薦制度は全くないと答えている。

現行の推薦入学制度で改善してほしいと思う事項に対する複数回答の割合を次に示す。

現在で十分	72 人	26.7 %
競技力の評価を高く	78 人	28.9 %
学業成績の基準を低く	45 人	16.7 %
指導者の意見を重視	77 人	28.5 %
将来性の評価を高く	47 人	17.4 %
その他	13 人	4.8 %

これらの項目中「指導者の意見をもっと重視してほしい」は、公立 22.8%・私立 35.5%で有意な差が認められた ( $\chi^2 = 5.29$   $P < 0.05$   $N = 270$ )。

推薦入学制度に満足しているかどうかに対する回答は、公私別に差が見られた ( $\chi^2 = 24.60$   $P < 0.001$   $N = 270$ )。やや満足しているまでを含め、満足しているが公立 42.9%・私立 57.1%，不満足は公立 28.2%・私立 37.1%と、私立の方が満足・不満足とも高くなっている。

図6は優秀選手に対する経済的援助制度について答の割合を示している。公私別には大きな差がみられ ( $\chi^2 = 151.01$   $P < 0.001$   $N = 270$ )，公立では免除制度は3校 (2.0%) が「一部免除制度はあるが不十分である」と答えただけである。それに対し私立では、学費全額免除の制度があるのは 50.4%，一部免除の制度は 22.7%があると答えている。

入学してきた選手たちの生活の場について、寮や合宿所の有無の率を公私別に示した。

	公立	私立
チーム専用	1.3 %	13.2 %
他部と共同	10.1 %	28.1 %
私有のもの	3.4 %	5.8 %
借用したもの	9.4 %	5.8 %
全くない	73.2 %	39.7 %
その他	2.7 %	6.6 %

私立では 52.9%が何らかの形で寮・合宿所を有しているのに対し、公立では約半分の 24.4%となっ

おり、公私別に差が認められる ( $\chi^2 = 44.53$   $P < 0.001$   $N = 270$ )。選手を自宅に下宿させたことのある指導者は 24.3%で、公私別に差は見られない。

## 考 察

指導者のうち 97.1%はスカウト活動と競技成績との関係を認め、95.9%が必要性を認めている。現在ある程度以上力を入れてスカウト活動をしているのは、公立 50.3%・私立 61.1%と公私別に差があり、必要を認めているに比較すると低くなっている。それがもっと活動したいの 71.1%につながっているものと思われる。

スカウト活動をしている範囲は公私別に差がみられ、公立の方が狭くなっているのは、私立には学区の制限がほとんどないことから、当然と思われる。スカウト活動をしたい範囲にも公私別の差がみられ、その差は現在活動している範囲を基準に、それぞれ一回り範囲を広げたいと希望していることを表している。

年間のスカウト活動日数は、私立が公立の 2 倍弱と大きな差が認められ、そのために練習を指導できない日数にも、公私別の差が認められる。スカウトのために観る試合数には公私別の差がみられないことから、試合を観る以外のスカウト活動、中学校や選手・関係者の自宅の訪問など、に違いがあるものと思われる。

スカウトの対象とする選手を決めるための資料として用いるのは、体力データ・試合成績・競技歴・トレーニング歴より選手の動きや身体形態の方が多くなっている。これには公私別の差はなく、指導者が自分自身の目で確かめた資料を重視する姿勢がうかがわれる。

スカウト活動の対象は、本人よりも中学校の指導者など中学校の関係者が最も多く、受験の決定にも大きく影響すると考えているとみられ、中学側への配慮が感じられる。活動の内容として話すのは、指導者自身やチームについてが多く、情熱的に指導方針やチームの現状を話す姿が目につくようである。話す内容では、経済的な条件に唯一公私別に差がみ

られたのは当然ともいえるが、教育的観点から問題視される点であろう。

スカウト活動は指導者自身やスタッフが行っているが、スカウト担当者がほしいという率も高く、指導しながらのスカウト活動はチームの練習を指導できないこともあり、指導者の負担になっていると思われる。

スカウト活動の対象となる選手の情報源は公私別の差がなく、中学の先生が多い。情報収集の組織を必要とし組織化は可能だとしているが、日常の指導や目前のスカウト活動の負担の上に、さらにスカウト情報収集の組織化は負担が大きすぎ、可能性は低いと思われる。

スカウト活動に要する経費の出所は、公私別に差がみられるが、公私立ともに自己負担が最も多くなっている。金額的にも10万円以下の割合が多い。公私別の差が認められることや、金額や出所に私立の半数弱に大きな差が見られるなど、正確な調査の難しい設問であった。

スカウトした選手が入学してくる率は60%以上が57.6%で、スカウトした選手の活躍する率は60%以上が76.2%であった。これらの率を高いと見るかどうか対象を変えた調査など、今後の課題となるであろう。入学率に公私別の差がないのは意外な感がある。

スカウト活動の現状に、指導者たちはいやな思いもしながら、知人が増え、その後のスカウトに協力してもらえなどの長所を抛り所として、現状に満足している様子が分かる。

積極的にスカウトはしていなくても、積極的なスカウト活動の結果としても、受験した優秀選手が入学選考で合格できるかどうかは、大きな関門である。推薦入学制度の有無についての答には公私別に差があり、制度がないのは公立の方が多いにもかかわらず、制度への不満は私立の方が高くなっている。推薦の仕方が現状で十分というのは、公私あわせて約25%で、競技力の評価をもっと高くや指導者の意見を聞いてほしいが28%台である。指導者の意見を聞いてほしいという回答には、公私別の差が認められる。公立の指導者も同意見が多いと思われるが、公立とい

う学校の性格上一種のアキrameから主張を避けているのであろう。

推薦入学制度に対する満足度・不満足度とも私立の方が高いのは、制度が学校によってかなり異なることや、指導者の要求の程度の違いが原因であると思われる。推薦入学制度と同様に優秀選手に対する経済的援助制度は、公私別に大きな差がみられ、公立にはほとんどない。入学してきた選手の生活の場として、寮や合宿所は私立の方が多く、公私別に差がみられる。私立の方がスカウト活動が盛んなのは、これら三点が大きな理由であると思われる。

## まとめ

スポーツ指導者のコーチングの一側面として、スカウト活動について高校の指導者を対象に調査し、次のような結果を得た。

- (1) 指導者はスカウト活動と競技成績の関係を認め、必要性を認めている。
- (2) スカウト活動の範囲は、活動中の範囲も活動を希望する範囲も、私立の方が広い。広げたいという希望を公私立の指導者ともに持っている。
- (3) スカウト活動日数は私立の方が多いが、年間観戦日数は変わりなく、学校や家庭の訪問が行われているものと思われる。
- (4) スカウトする選手の資料は、選手の動きや身体形態など指導者自身の目の方を重視していると思われる。
- (5) スカウト活動は指導者自身が当たり、自分やチームについて理解を求め、中学関係者に配慮して活動している。
- (6) スカウト活動で公私別に最も大きな相違点は、経済的な問題である。活動経費・学費免除制度・寮や合宿所など、公立の指導者のスカウト活動に大きなハンディになっているとおもわれる。

コーチングの効果的な遂行に、スカウト活動は必要性が認められ、活動範囲・経費・入学選抜制度などの改善が必要であると、指導者は考えている。スカウト活動に要する経費が、指導者の自己負担でになっていることは改善を要するであろう。しかし、

活動範囲・選抜制度などを変更するには、教育機関で行われるスポーツ活動としては、他の観点からも検討すべき問題が存在すると思われる。「野球ではスカウト活動は全面的に禁止されています」とコメントしながら、活動していると答えた例があったが、甲子園に代表される高校野球では、スカウト活動が活発に行われていることは周知のことである<sup>2)</sup>。それが教育を阻害しているという指摘もある。

スカウト活動がコーチングの一部として位置づけられていないのは、やってはならない建て前からであると思われる。しかし、現実には競技成績に大きく影響するほど活発に行われ、教育を阻害しているという批判がある。それならば、活動範囲の制限や、活動内容は、指導者が自身の理解を求め指導方針や実績を説明するにとどめるなどのルールを設けて、スカウト活動をコーチングの一部として位置づけることが必要であろう。

#### 引用文献

- 1) 浜上潮児 ぼくはなぜ走るのだろう P4 1972 講談社
- 2) 黄民基 高校野球の真実 P122 1989 JICC
- 3) 吉岡隆徳 わが人生一直線 P107 1979 日本経済新聞社

#### 参考文献

- 1) 今橋盛勝ほか スポーツ部活 1987 草土文化
- 2) 木村幸治 伴走者 1990 JICC
- 3) 糸野豊・佐伯聰夫編著 現代スポーツ指導者論 1988 ぎょうせい
- 4) 中村敏雄ほか 現代スポーツ論 1988 大修館書店
- 5) 日本体育協会スポーツ科学委員会 コーチングの実態に関する調査報告 1968
- 6) 佐藤政廣 コーチングの実際 1988 ぎょうせい